みんなの広場

はっらっ ところ 野老っ子

「いつかは世界の舞台で」

小林　正俊さん
（青葉台在住）

『オペラ』のイメージというと、きらびやかな衣装を身にまとい、演する役者さん も別の世界の住人のように思われますが、今回ご紹介するフリーの声楽家の小林さんは、とても気さくでエネルギッシュな性格の持ち主です。

小林さんは、子どものころから歌うことが大好きでした。東京学芸大学音楽課を卒業後、同大学院を修了し、イタリア・ローマへの留学経験もあります。ヴェルディ作曲の『仮面舞踏会』のリッカルド役等、数々のオペラに出演し、音質は、テノール（男性における高い音質）を担当しています。

オペラは、演じながら歌うことが魅力のひとつで、ハーモニーの楽しさを味わうこともできます。

「自分が演じているから、このオペラを観に行きたいと言われるように役を演じたいんです」と、目を輝かせながら話してくれました。

小林さんは、声楽家として活動するかたわら『フライングマウスオペラ』のメンバーとしての活動も積極的に行っています。

この団体は、市民文化センターミューズを公演活動（年2回公演）の場とするオペラ愛好家のグループで、普段は学生や会社員などの職業を持ちながら、プロのソリスト（独唱者）として活躍することを夢みる20歳代が中心のグループです。「公演を開くことが自分たちの勉強になるとともに、1人でも多くの人に、オペラの魅力を知ってもらいたい」と活動の目的を話してくれました。

声楽家で成功するのは、ほんの一握りの人で、ある程度の年齢になってはじめて認められるという厳しい世界です。それだけに舞台の経験を積むことが、とても重要なのだそうです。根っからの明るい性格で、めげたりすることはないのですが、やはりスランプに陥ることもあるそうです。

炉端焼き屋でアルバイトもしているという小林さん。親しみやすい性格からお店でも人気者です。

「いつかは、世界の舞台で活躍したい」と大きな夢を語ります。

次回のミューズ公演は、来年の2月を予定しています。心に残るテノールの歌声が、ミューズのホールに響きわたることでしょう。

オペラ「つばめ」の舞台の一場面

▲力強いリズムに乗せて踊る「よさこい鳴子踊り」が、ところざわまつりに色を添えます。
10月10日(日)／中央公民館西側の市営駐車場

TOKOROZAWA ものしりウォーキング 55

久米・菊川坂

菊川坂

南陵中学校の東側の道路を南に下る坂を「菊川坂」といいます。名称の由来は、昔、坂の途中に菊川という医者の家があったことによります。

菊川というのは、江戸時代の寛政7年（1795）ころに久米の平塚家を継いで医業を開いた菊川儀角に始まる医者の家のことです。同家は4代にわたって医業を営み、そのうち3代までが菊川を名乗っていました。

菊川儀角は、はじめ薩摩藩に仕えていましたが、後に江戸小日向（東京都文京区）で医業を開き、縁あって跡継ぎのなかった平塚家の養子となりました。

久米に移り住んだ儀角は、在郷の医師として活躍するとともに、川越藩の侍医であったといいます。儀角は文化12年（1815）に亡くなりますが、その後医業を継ぐ者がなかったため、同家では北野村出身の医師宗順を迎え入れました。また宗順没後も、やはり医業を継ぐ者がなかったため、野口村（東村山市）出身で幕府の奥医師に学んだ崇順を迎えたのでした。

崇順は研究心旺盛な医学者で、多くの難病を治癒したと伝えられています。また、その子の宗本は平塚姓を名乗って医業を継ぎ、明治時代に活躍しました。

ところで、菊川坂には今も当時の建物が残されています。現在、子孫の平塚氏が管理運営する所沢郷土美術館がそれです。長屋門から入る同美術館は、かつて住まいであった母屋を展示施設として市内在住の美術家の作品を公開し、敷地内には、ほかに土蔵や庭園を残しています。

中でも、母屋は嘉永6年（1853）の建築で、ちょうど崇順の時代に建てられたものです。内部は、書院のほか薬部屋など医者の家ならではの造りがみられます。また川越に向かう際に使われた籠は珍しいものです。

菊川坂の名は、地域の医療に尽くした同家が近郷近在に知られていったことにより、いつしか誰言うとなく名付けられ、今日まで伝えられたのではないでしょうか。

【所沢郷土美術館】
所在地　久米1447
電　話　2922－2965
開館日／開館時間　毎週日曜日／午前10時～午後5時

所沢郷土美術館

街かどズームイン

▶皆さんからの「街かどズームイン」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「私の健康法」▶インフルエンザが心配な季節がやってきました▶毎日の生活の中のちょっとした気配りが健康につながります▶皆さんの健康法をお寄せください▶締め切りは11月5日(金)必着▶住所・氏名・年齢・電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1－1－1所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係

▲彩の国まごころ国体に向け、新所沢東地区自治会の皆さんが会場までの沿道を花で飾り付けました。
10月7日(木)／市民体育館付近の道路

▲秋の夜の静かなひととき、横笛の奏でるハーモニーが訪れた人々を魅了した「月見茶会と横笛演奏」。
9月24日(金)／彩翔亭（所沢航空記念公園内）

少子イクル ふれあい館「エコロ」不用品ガイド

●**譲ります**　▷耐火金庫▷昭和文学全集（全51巻）▷2槽式洗濯機▷剣道防具一式▷男の子用着物▷デスクトップパソコン▷一輪車▷鍵盤付きハーモニカ▷ベビーサークル

●**求めます**　▷工業用ミシン▷大人用自転車▷ベビーベッド▷草刈り機▷電気マッサージ機▷ルームランナー▷男の子用自転車（21インチ）▷FAX付き電話機

◎登録翌月の初旬に内容を館内に展示しています。

受付方法　リサイクルふれあい館へお問い合わせください。

休館日　月曜日、祝休日（ただし、11月13日(土)・14日(日)は臨時休館です）

申し込み・問い合わせ　リサイクルふれあい館（☎2994-5374・FAX2994-1118）

とことこ町内会めぐり

【三ヶ島第7区自治連合会】
～駅前ロータリーを花でいっぱいに～

三ヶ島第7区自治連合会は、市の西、西武池袋線の狭山ヶ丘駅の東側に位置し、中心を行政道路が通っています。当自治会は14支部、2,770世帯の会員から成り、三ヶ島地区で最大の自治会です。

平成12年夏、駅前ロータリーを中心に花を植えてみてはと市から提案があり、直ちに実施しました。狭山ヶ丘中学校の美術部の生徒さんにデザインを、自治会や長生クラブの皆さんに植え付けのお手伝いをしていただき、2日がかりで仕上げました。このことは、地元紙にホットなニュースとして取り上げられました。

また、昨年の9月下旬、区画整理の一環として、駅前ロータリーの記念碑と植栽の周りに四季折々の草花を植え替えました。そして、竣工式典も無事行われました。

花の植え付け作業のようす

今年、桜前線の便りが関東地方まで届いたころ、ふとロータリーのしだれ桜のことを思い出し、足を運んでみると、長い冬を越えた幹から若葉が、枯れ残った小枝から花びらが誇らしげに咲いていました。来年の春には、きっと沢山の花びらを付け、多くの皆さんに微笑みかけてくれると思うと今から楽しみです。

12月には、モミの木に色とりどりのイルミネーションも飾り付ける予定で、通勤・通学の人の目を楽しませてくれることでしょう。

誰でもエッセイ

テーマ　私の金ボタン

子育てマラソンで金メダル
中新井・岩田　恵美子

私が金メダルをもらえるとしたら、それは、子どもを4人産んで、育てたことに対してでしょう。

1年おきに生まれてきた彼らを、1人目は、おろおろしながらもじっくりと、2人目は少し慣れてきてのんびりと、3人目は髪を振り乱してバタバタと、4人目は、体力の限界に挑みながら育てたように思います。

マラソンランナーが、自分と闘いながらゴールを目指すように、私もこれでいいのかと自問自答しながら子育てマラソンを走ってきました。

子育てのゴールはどこなのか定かではありませんが、子どもたちの今後が、私の金メダルをはく奪することのないように、そして彼らも自分の金メダルを獲得できるように、願ってやみません。

やっと手に入れた金メダル
若狭・井上　美惠子

私が50歳を迎える数年前のこと。両親を亡くした曽野綾子さんのエッセイにある「両親が健在なうちは、死に対して防波堤の役割をしてくれる」の一文を思い出した。「生きているうちに何かをしなければ」と思っても何をしていいのかわからない。

ある日都内の書店に行くと、「あなたの生まれた日の新聞が見られます」というコーナーがあった。書けば残る。生きていたことの証明ができるのだ。

そのとき、『投稿』することを思いついた。いざ、書いても、書いても、没、没、没…。正体のないものと闘っているようなものである。

ある日、70代の男性の投稿に「掲載されるまでは死ねない」とあった。まだ、私には20年もある。あせらず・めげず・あきらめずに書き続けようと決心した。

しばらくして、やっと「金メダル」を手にした。足跡消えても手の跡残る。

私が思う金メダル
中新井・高橋　祥子

私も夫も、まだ金メダルを手にしてはいない。なぜなら、私が思う金メダルだからである。それは、私が夫が最後に息を引き取るときの「ありがとう」の言葉。この「ありがとう」は私だけの思いで、夫は知らない。

縁あって夫婦になり子を育て、定年を迎え、今は元気でアルバイト。私は好きなように過ごさせてもらい、60代にこのような時間が待っていてくれたなんて、とてもうれしい。

家族への金メダル
和ヶ原・山ノ井　義治

亡くなった柴犬は、小柄だがプライドが高く、寂しがりやでとてもやきもちやきだった。

トーストが少しこげたような赤褐色のような毛並み。もちもちとした体の手触り。そして狐のような憂いをたたえた目。

家族の会話が途切れたときも、じゃれて愛きょうを振りまき、和ませてくれた。うれしいときも沈んだときもいつも一緒で、心に灯かりをともしてくれた。

亡くなるときは、付きっきりで介護したが、「楽しませてくれてありがとう」と旨で礼を言った。亡きがらを抱いて、大好きだった散歩コースを1周した。

ペットは、居なくなってから、家族の一員だった大切さがわかる。似た犬を見かけると、今どこに居るのかと思う。

天国に居るはずの彼の首輪に感謝の金メダルをかけてあげたい。

心の中の金メダル
東所沢・勅使河原　亜矢

運動オンチの私は、いつも徒競走で「ビリ」でした。一等賞やメダルを手にする友だちがうらやましいと思ったが、誰か1人にしか手に入らないものと、考え方をかえました。

でも、メダルなど無くても、頑張ったことや努力したことが一番大切です。

目や手にすることがなくても、頑張っている人は、皆、心の中に金メダルを持っていると思います。

世界でたったひとつのメダル
上安松・西村　ヒサ子

敬老の日に、孫が手作りのメダルをプレゼントしてくれました。「じいじいのメダルはブルー。ばばあのメダルはピンク」。メダルには、一言「元気でね」と書いてありました。

今年の夏、体調を崩し、入院を余儀なくされたじいじいの闘病姿を見て、孫たちも心配してくれたのでしょう。

折り紙とリボンの軽いメダルですが、何だかずっしりとした重みを感じさせるメダルです。このかわいいメダルを手に、健康のありがたさ、喜び、そして大切さが心底身に沁みた敬老の日でした。

金でも銀でも銅でもない、世界で2つとないメダルを首にかけて、お互い年がいもなく、Vサインでの記念写真を撮りました。

若いときは、う余曲折があったが、感謝の「ありがとう」のメダルに向かってゴールまで2人3脚で歩いていきたい。

――次回のテーマは「私の健康法」です――